

カワウのカラーマーキング —東京・千葉での調査— 福田道雄 (カワウ標識調査グループ)

カワウは、現在では全国のいたるところで普通に見られる鳥である。しかし 1970 年代前半には、全国 3 カ所のコロニーに 1,500-2000 羽が生息するのみとなり、数少ない鳥の一つであった。日本でのカワウのカラーマーキングは、その時期の 1975 年から東京都台東区上野公園の不忍池で始められた。そしてその後、カワウの分布が全国に拡大し、カラーマーキングの実施場所も 1990 年代から各地に広がった。今回は、東京都と千葉県で行われたカラーマーキングについて報告したい。

まず、標識鳥としてのカワウの良い点は 1) 体が大きく、足が見えやすい。2) 開けた場所を好み、長時間静止していることが多い。3) ヒナは時期を合わせれば、捕獲が容易。一方、難しい点は 1) 巣立った個体は捕獲が困難。2) ヒナを捕獲する場合には、バンディングの最適期を知るために、事前に繁殖状況調査が必要。

カラーマーキングは行動調査 (1975-1995 年) と移動調査 (1998-2016 年) を目的として、両足にカラーリングを装着することで行われた。両調査で使われたカラーリング、リング材料と装着方法、得られた成果などは以下の通りである。

最初の行動調査を実施した場所は上記の不忍池で、現在各地にあるコロニーとは異なり、種々の行動調査に適した条件が揃っていた。そこで、1-5 色のパイプリング (リング幅 2-3mm) の 1-4 環を組み合わせ、左右の足にコイル状に結んで装着し、20 年間にヒナから成鳥までの 1,212 個体を識別した。カラーリングの読み取りは複雑であったが、調査者が同一であったので、リングの色組み合わせ自体から、直接多くの基礎資料が読み取れた。そして、マーキング個体のコロニー内での行動が日常的に継続観察された。なお、前半の約 10 年間は調査地が青森から愛知までの間で、唯一のコロニーであったことから、標識個体の生存期間を推定するデータも得られた。そのほか、初繁殖年齢、つがい関係、つがいの繁殖成績歴などの各種のデータが得られた。

次いで移動調査は 1989 年から開始し、東京と千葉の合計 1-4 カ所のコロニーで、今年までの 16 年間で 6,720 個体 (ヒナ以外 42 個体) をマーキングした。カラーリングは、黄色のプラスチック板に記号を彫り込み、ふ蹠に合わせて曲げて成形し、これを押し開いて装着した。この方法だと非常に多数の個体を短時間で装着できた。また、記号は 2-3 字の数字と英字の組み合わせにし、誰でも読み取れるようにした。そしてこれまでに、1,698 個体 (放鳥数の 25.3%、同一個体の記録は 1-265 回、平均 3.7 回) について合計 6,302 件の観察記録が収集できた (記号の読めなかった記録は含めず)。記録があった場所数は 284 カ所で、青森から滋賀県までの本州太平洋岸の都県に広がっていたが、多くの記録場所は千葉、東京、神奈川 (82.0%) であった。このように多数の記録が得られたことから、記録された最高齢時の年齢別の個体数を集計したところ、群れの年齢構成に似た傾向を示した。なお、同時に 165 個体 (放鳥数の 2.5%、うち 70 個体が有害鳥駆除) の回収・保護が得られたので、最高齢時記録数との比較を行った。最後に、マーキング個体の観察記録数の推移を見たところ、調査年の進行とともに低下する傾向がみられた。これは、一般の鳥の観察者の好奇心に多く依存した長期調査にとって、避けられないマエナス要因のように思われる。